受付番号 26 番
（実行委員会記入欄）

1 「うつし世と夢で数珠玉投げ合ふよ」

2 「雁来紅迷子の知らせ反響す」

3 「せんさうは嫌鶏頭が増えるから」

4 「試験管のうちがはの傷実南天」

5 「家ありて町の始まる落し水」

6 「ギター教室蔦に呑まれてしまひけり」

7 「秋祭開いて捨ててある漫画」

8 「月天心夜市常常涎臭」

9 「くちびるの縷々浮かびくる秋の川」

10 「きつつききつつき好きだつて言つていい」

11 「コスモスや海風を知らない体」

12 「まだ新鮮な流星を拾ひけり」

13 「栗から紅血階段を転がるか」

14 「饅頭の割られて乾く夜長かな」

15 「肉親の異国の言葉秋夕焼」

16 「草の花悪事なす手のやはらかく」

17 「星月夜遅々と古びる貯水槽」

18 「骨のまだしつとりとして蔦かづら」

19 「初紅葉鉛筆全て尖らせる」

20 「月鈴子春画のおしりやはらかさう」

21 「鶉包んで空白のあたたかさ」

22 「地は親しきもの皀角子落ちなさい」

23 「金柑は幽体離脱したこども」

24 「全階に霧を吐き出すエレベーター」

25 「歯の裏を舌でなぞりてをれば冬」

受付番号26番
（実行委員会記入欄）

26 「黒板を富士の冷たさだと思ふ」

27 「冬館ノートの作者不明の詩」

28 「セーター着て左の目から眠くなる」

29 「ひさかたの冬日を浴びて出土品」

30 「さむいから昔のよびかたで呼べよ」

31 「鯛焼を食みてしづかに湿り合ふ」

32 「玉子酒またひとり信長の死ぬ」

33 「冬夕焼磨かれ抜きし泥団子」

34 「にんじんようすうすとつらなる木々よ」

35 「マネキンのあれは左手冬の浜」

36 「ひよろひよろとされど蕪でありにけり」

37 「冬の虹右手左手血のかよふ」

38 「略されし裸婦画の四肢や山眠る」

39 「赤いさざんくわ心臓が泣いてゐる」

40 「片恋や冬のプールに手をつけて」

41 「寒林をもつと獣になる走る」

42 「手を伸ばしても凍星のとほくなる」

43 「山茶花の花びらの影吹かれをり」

44 「着膨れて電線の影踏みゆけり」

45 「墜とさるる海鼠管足伸ばしつつ」

46 「冬の星何度も削る永久歯」

47 「湯たんぽのあはれ島流しとなりぬ」

48 「白鳥や重ねて捨てて科学本」

49 「弁当の偏り鳰の沈みゆく」

50 「戻り来て営業車から出すジャンパー」

受付番号 26 番
（実行委員会記入欄）

51 「裏山のここにも竹が凍ててゐる」

52 「黄ばみたる部室の壁や十二月」

53 「ポインセチア文庫に絵葉書の栞」

54 「クリスマスイブ棒読みの三博士」

55 「クリスマスフォト怒られたあとだらう」

56 「らふばいや空也の口のはんびらき」

57 「包丁を正しく使ふ雪女」

58 「白鳥を抱くや切疵作りつつ」

59 「マフラーに雪玉包み持ちかへる」

60 「恋愛至上主義者の日記果てにけり」

61 「なまはげの手先がやけに美しい」

62 「すいせん図書並びて残る寒さかな」

63 「怪人の今際の射光冴返る」

64 「オーボエと繰り返す唇に春」

65 「夜の梅指より煙出す遊び」

66 「きさらぎのこころにくらき水素水」

67 「冴返る指をはなれて硬き爪」

68 「初蝶は九分九厘粉であり」

69 「わづかだがどの雛も体温のある」

70 「口笛に呼ばるる雨よ桜貝」

71 「啓蟄や顔ぼんやりと餃子像」

72 「木の瘤に水気ありけり卒業期」

73 「春潮に指輪を返すときの音」

74 「たんぽぽの最奥に歯のありにけり」

75 「春の夜のふと足音の止む廊下」

受付番号 26 番
（実行委員会記入欄）

76 ［番号で呼ばれ朧の部屋へ入る］

77 ［幽霊のこどもはしやぼん玉の味］

78 ［佐保姫の体育座りしてゐたり］

79 ［また眠らう靴のきはまで春の泥］

80 ［春の雲・偏頭痛・糸引く光］

81 ［春の野の奥から墨となつてゆく］

82 ［太陽の塔のくちぶえ夏来る］

83 ［嘘つくはたのし白玉よく冷えし］

84 ［指に指熱し燕子花をつまむ］

85 ［はらわたのはじめてひかる蛙かな］

86 ［すこやかな恋愛パイナップルを切る］

87 ［さみしくて小指に来たかほうたるよ］

88 ［海の日の白熊一歩づつ狂ふ］

89 ［夏座敷広々使ひ死んでみる］

90 ［くだものをもらふ蟻ごともらひけり］

91 ［いつまでも砂の出てくる水着かな］

92 ［うなじさかみち明日アイスをおごつてよ］

93 ［炎昼や地球に釣糸を垂らす］

94 ［かんたんに木々の組まれる祭かな］

95 ［あした死ぬ金魚から掬はれにけり］

96 ［許すから怒らないから浮いてこい］

97 ［麻服のまだごはごはと抱擁す］

98 ［夏負けて空より活字降つてくる］

99 ［うすばかげろふ永遠にまちぼうけ］

100 ［既に百年の昼寝となりにけり］